

潮騒

地域資源

地域資源は、その土地の自然や地域産業、組織・団体、人材等のことを指しますが、歴史文化・生活文化も地域資源の一つに挙げられます。

表浜校区の地域資源は、豊かな自然や広大な農地、そして魅力ある伝統的な歴史文化(行事・祭)などに支えられ、今もなお受け継がれています。



CONTENTS

- ◆特集:地域資源「祭・行事」…………… P.1~4
- ◆表浜むかし話「海亀のお墓」……………P.5
- ◆協議会の活動報告……………P.6
- ◆海岸侵食講演会 ◆平成14年度事業計画……………P.7

《特集》

地域資源

祭・行事

コミュニティの活性化につながる行事や祭などの役割は、一般に行事の必要性や祭の歴史・背景が十分に伝承されず、近年盛んに行われる行事であったかのような認識がされているかもしれません。今回は、地域資源として地域で培われた行事や祭の共同作業を通じ、「近所住民同士で支え合う相互扶助」についてひも解き、地域住民のかかわりから地域の活性化を図る活動についてご紹介していきます。

引き継がれる祭・消え去る行事

地域の信頼に支えられた祭

おたがまつり<玉取祭>(長仙寺/六連校区)

祭は、神仏や自然に対する畏敬(いけい)の念から行われることが多いと思います。例えば、雨乞いをルーツとする田原祭も同様です。おたがまつりの玉取は、海に対して恐れ敬う気持ちがベースにあると思います。

玉取は、海や海を支配する神仏に対して、その加護を受けようと若者達が玉を争って取り合います。玉は海であり神仏の加護の象徴なのです。

おたがまつりは、若者達に大人社会の疑似体験をさせる絶好の場なのです。若者達は、祭に関わることで、社会に参画している自覚を持ちます。また社会も若者達を認める場として祭を大切にしています。日本全国の多くの祭が、子供や若者を神仏の代理者として役付けする意味は、こうしたところにあるのかもしれません。

おたがまつりが現在まで生き残ったのは、祭を担う地域住民が、自然や神仏に対する畏敬の念と、「共に住む者」としての自覚と誇りを、世代の違いを超えて常に持っていたからだと思います。その畏敬の念と、地域に暮らす自覚と誇りが、地域社会の発展や融和につながっていると思うのです。

*畏敬:かしこまり、うやまうこと



玉取祭風景



長仙寺副住職
渡辺真教
(44歳)

神楽(六連校区・東部校区・神戸地区)

神楽の目的は、神様に神楽を奉納し村の安全を祈願することにあります。

百々地区の神楽は約400年の歴史に支えられ、これまで地域の伝統文化として継承されてきました。

私は、5歳の頃から横笛を吹き神楽に接してきましたが、私なりに感じる事は、地域の方達の支える空気や力添えがあるからこそ百々の文化として神楽が継承できていると思います。



六連校区
鈴木昇太郎
(76歳)



神楽風景 / 百々神社

神楽をやる人がなく、途切れた時代もありました。しかし、地区の伝統芸能である神楽を谷熊神楽保存会員が受け継ぎ、地域の祭で披露しています。

これからも地域の祭を飾り、皆さんの交流が増すことができるよう努力したいと思います。

また、私達の子供に神楽を見せてあげたいと思っています。



東部校区
安田明弘
(31歳)

住民同士を結び付ける現在の行事

主な校区行事

(校区総代のコメント)

縦・横のコミュニケーションが失われつつある今、校区・地区として住民のまとまりを持ち続けたいため各種の行事等を行っています。地域の文化(行事、祭など)は、地域が自己主張するための手段であると同時に、自らの地域を知り、自らの地域を創る方法を模索する手段にもなっていると思います。



送り神風景

地区行事を任された子供達の行事

送り神 (大泉寺 / 大草地区)

江戸時代の頃から、大草地区では子供達に疫病が流行っていました。村の衆達は流行り病を大草から追い出すため、毎年2月8日と12月8日に「八日餅(ぼた餅等)」をつき神様に供えて、村の安泰を願い続けました。

この行事(送り神)の主役は、ワラで男女の人形と竹で船飾りを作る男ばかりの子供達でした。行事の当日は、深夜暗いうちに村中の家々を巡り、くど(かまど)の前で御払いをします。翌日の夜には、人形に封じ込めた疫病神を数名で担ぎ、「送り神を送るぞ。2月8日の事始め。(師走8日の事納め。)」という掛け声で村境(水川境・新井境)に送り出しました。送り出した後、後ろを振り向かないことが行事の慣わしで、七つ角を曲がるまで皆後ろを振り向きませんでした。

行事を重ねると自然に昔と違う型になってきましたが、本来の目的は、地域が子供を守ること、村が団結して何かに取り組むこと、村の大切さを皆が考えることにあったと思います。

医療の発達などのため、迷信じみた行事は昭和33年頃に取り止められましたが、昔の人達は常に村のことを考えていたことが分かります。



六連校区:カーブラー清掃



大草校区:地引網



東部校区:公民館まつり



送り神風景 写真提供 / 小野田勝一



神戸校区:ミニバレーボール大会



大草校区
太田克一
(76歳)



大草校区
太田良治
(59歳)

住民同士を結び付ける現在の行事

主な地区行事の例

神戸校区 / 谷ノ口地区

草刈り(年2回) お日待女(年4回)

地引網・親睦会ほか

谷ノ口地区民(約250人)の内、200人以上が参加する行事です。

六連校区 / 百々地区

草刈り(年2回) お日待女(年2~3回/組によって異なる)

祭(春・秋)

春の大祭は、持ち揚げや玉取(大漁・豊作・家内安全祈願が目的)が行われるため、多くの区民が参加している行事です。



六連校区
清水秀夫
(53歳)

昔は親睦会やソフトボール大会も地区でやってました。最近では行事が減ってきていますが、世帯(組)毎や異なる世代間で交流が催されているようです。行事は少なくなりましたが、人と人のお付き合いを大切にするために地区行事は重要だと思います。



谷ノ口地区:草刈り



百々地区:春の大祭

表浜地区全体の行事



第4回表浜自然ふれあいフェスティバル(鍋物を担当されたみなさん)



清掃活動に汗を流すみなさん



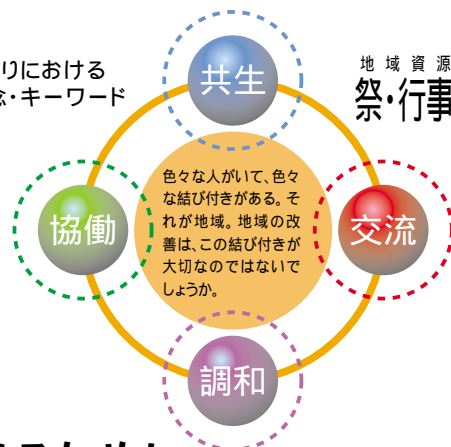
東部中学校の生徒のみなさん



六連校区
大谷ますみ
(44歳)

《表浜地区の行事に参加して》自分たちの得意なことを校区・地区のために役立てたり、多くの方と活動する中で楽しみや心のふれあい、そして私達自身が充実感を得ることは大切だと感じました。

まちづくりにおける
共通理念・キーワード



地域資源を活かす取り組み

自らの地域を知り・自らの地域を創る活動 (谷ノ口総合整備促進協議会 / 谷ノ口地区)

住民参加型の「まちづくり」が叫ばれ、集落が一体となって自らの地域に独自の誇るべき新しい価値を見出すため、地域らしさを確立する活動を始めました。

谷ノ口地区は、集落全体の機能と生活環境の改善、谷ノ口海岸への来訪者増加による安全確保を図るため、谷ノ口地区の魅力を発揮しながら自立的な地域活動を促進して、基礎的な住民自治の原点であるコミュニティの活性化等に取り組んでいます。この取り組みは、太平洋岸地域整備基本構想・基本計画(H8～策定)に基づき、地域住民の意見を地域に反映させながら、価値ある海岸の整備に結びつける取り組みとして行っています。



集落内道路の現地調査



会議風景

谷ノ口拠点地区(全体イメージ)

整備計画のプラン内容

海浜部:健康海浜、自然保護・観察、農漁業体験

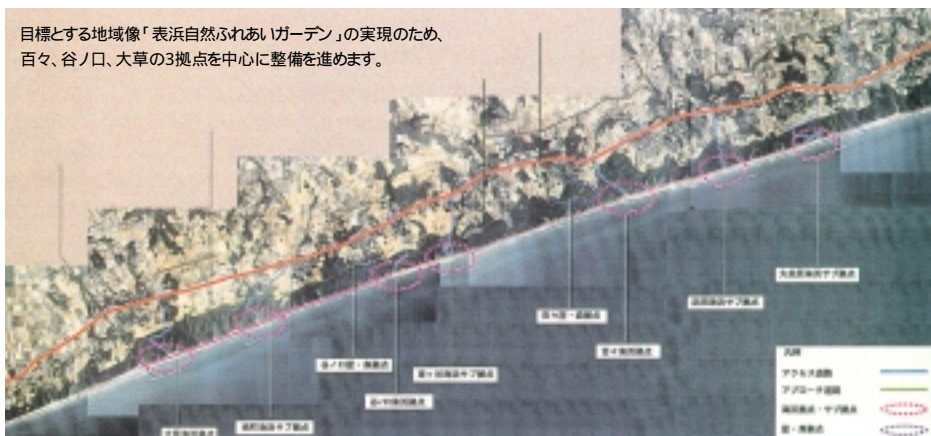
崖森部:自然保護観察、自然体験の森

保養療養、農漁業体験



太平洋岸地域整備基本計画

目標とする地域像「表浜自然ふれあいガーデン」の実現のため、百々、谷ノ口、大草の3拠点を中心に整備を進めます。



地域を変えるために

地域社会は、ある一定の地域においてその地縁を契機に、共通の目標や関心を持つ人々が生活環境を向上させようとお互いが協力し、意識的・計画的に取り組んでいく中で形成される地域的なまとまりです。

個々の家庭は、生活に必要な補完を集落内の連帯や協力によってではなく、市場や公共が提供するモノやサービスによって充足するようになっていきます。それは、代価を支払さえすれば、それ以上の要求をされることなく、いつでも補完が受けられるということにつながっているからだと思えます。

その結果、地区への期待は薄くなり地区の交流行事、祭など地域によって徐々に無くなってきました。もしかしたら地区への期待に何の意義も見出していない方達にとって「理想の地域社会」なのかもしれません。

しかし、住みよい集落環境は、一朝一夕にして成るものではありません。「自分だけが良ければ」とする自我が全面に強く押し出され、誰もが自分だけを考え、他人やよその家庭を省みしないと云うのでは地域社会は成り立ちませんし、住みよい集落環境は改善できません。

弱まる連帯意識、そして一方では、益々強くなる責任の伴わない権利要求が繰り返されています。そこで、なんとかまとまりのある地域社会を実現するために、住民意識に根ざしたコミュニティ活動を促進して、地域の連帯感に基づいた意識を盛り上げていかなければならないと思えます。



谷ノ口総合整備促進協議会
会長

福井哲巳

「海亀のお墓」

山田もと

「浜へ亀がよったげえなぞ。」「どえらい大きい亀だけえな。」
誰がいったのか、どこから聞こえてきたのかわからないのに、まるで疾風のように、次から次へつたわった。学校帰りの子どもたちは、顔を見合せると、

「はい、わしらも見に行か。」「うん、いかまい。」

どこの浜だかわからないのに、前の子達が走りだすと、その後が続いて、みんなほうべの方へやみくもに走った。私も友達のつうさやスエチャと、斜に肩からかけた鞆をおさえて、浜街道をつきると、いつも遊びに行ったり、学校から浜砂を運び上げたりする、東のほうべへ走った。

ほうべの上の、松林の中の小道に人だかりがしている。浜の衆が何かいいながら円くなっている。のぞきこもうとしても見えない。皆がくっつき合っていて中が見えない。しゃがんで、皆の足のすき間から覗くと、黒っぽい大きな丸いものが、道いっぱいじっとしている。

「それ、前へ出てみよ。」

赤銅色のおじさんが、前の方へだしてくれた。

「浦島太郎の亀だ。」

私はつい叫んだ。

「そうだな。こいだけ大きけや、浦島太郎をのせられるなあ。」

赤銅色のおじさんもいった。それはほんとに大きな亀だった。

おとながまたいで乗っても、両足が地につかないほどである。絵で見るとおりな亀の甲羅は、青みどろのようなもので汚れてはいるが、くつきりと亀甲型にひび割れている。尾っぽのような長い海草が、

両方の腹の辺りから、ずらりと並んでいる。浦島太郎の絵本で見た、亀の尾っぽと同じである。長いのは1メートルもあろうか。乾いて干からびたようになっていた。

頭がない。こんなに大勢の人にかこまれたので、こわがって頭を引っこめているのかな。大きな井にいっぱい水が入れ、頭の所においてある。そばに酒の一升びんが置いてある。「おしかったなあ。こんな立派な亀が死んどるとはなあ。」

「あれ、死んどるのかん。」

「うん、浜に打ち上げられておった時にやあ、はい死んどっただ。」

「4人も人で、ここまでのい上げただに。」

「生きとやあ、酒をたあんと呑まして海へ帰してやるだけだなあ。」

「酒？」

「ああ、亀は酒が大好きでな。酒を呑まして帰してやったら、大漁間違いなしだったになあ。」

ああ、あの井は酒が供えてあったのか。

「おとましいことをしたのう。」

一瞬皆がしんとなった。

「ここの松林じゃあ、どうだい。」

「よからあのう。」

なんのこともわからなかったけれど、亀は動かないし、酒も呑まないの、私達は帰ってしまった。2、3日たつての学校の帰り。

「まあいつべん、亀を見いいかまい。」

「どんねんなつとるすら。」

私達3人は、ほうべへ行って見たが、亀の姿は探してもなく、松林の中に、赤土が丸く盛り上げられていた。

「亀のお墓だね。」

「うん。きっとそうだよ。」



イラスト / 石川棟密

私達は手を合わせた。波の音がひととき大きく響いてきた。昭和4年か5年のころ、大草海岸のほうべであったことだった。それから亀のことは、とんと忘れて、この地を離れ、60年の余もたってしまった。

ふっと思い出して、亀のお墓を訪ねてみる気になり、東のほうべへ行こうとしたが、その道さえわからない。探して、やっとみてびっくり、普通った道が、どこが道やらわからないほどに草が茂

り、木が生えていて、両側の松、海風に耐えて枝振りおもしろく茂っていた松は1本も見当たらない。

地引き網をやらなくなってから50年にもなろうか。あの勢のよい掛け声が消えて50年、人々が踏まなくなれば、道も山もこんなにも荒れ果ててしまうのだろうか。

亀の坐っていた所は、道だったけれど、どの辺りか見当もつかず、ましてお墓の所在など、子どもの時の記憶だけでは、どうしようもない。足を踏み入れるすき間もないほどに草や雑木が茂っていて、あの大きな亀のお墓には会えずに立ちつくした。

変わらないのは、海の蒼さと、どうどう、どうどうと響く波の音だけである。

海岸侵食講演会を開催しました。

海岸侵食について考える講演会「消え行く表浜海岸～表浜海岸の侵食を考えよう～」が、平成14年8月4日(日)に田原文化ホールで開催しました。

講演会では、太平洋岸(表浜海岸)に供給される漂砂が天竜川上流のダム建設等で減少し、海岸侵食が進んでいることが指摘されました。

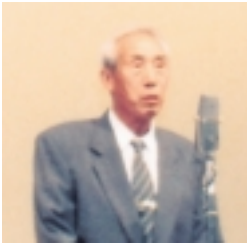
本地域では、侵食防止の工事が西側方向(伊良湖岬)に大きく影響することが説明され、半島全域に渡った侵食防止事業が達成されなければ互いの海岸を潰し合う事が付け加えられました。

意見交換会では、海岸を利用する色々な立場の方が、これからどうすれば海岸侵食を止められるのか、という論点で意見交換がされ、海岸侵食を食い止める方策は大変難しく、単純でないことがこの講演会で明らかにされました。

この講演会は、海岸を利用する多くの方達に共通した問題(海岸侵食)の中で、お互い知らないことを共通の議論にし、言い難い事、言われ難い事を意見交換できたことは大変重要だったと思います。



※写真左から ①那須和雄氏(愛知県東三河建設事務所 事業調整監)
②宇多高明氏(前国土交通省国土技術政策総合研究所 研究総務官)
③青木伸一氏(豊橋技術科学大学 助教授)



会長
あいさつ

平成14年度の事業計画

主催事業

第5回表浜自然ふれあいフェスティバル

日時—平成14年9月28日(土) AM9:00～PM1:00

※悪天候の場合は11月9日(土)に延期

場所—表浜一帯(メイン会場は大草海岸)

内容—清掃活動、太鼓演奏、地引網(予定)ほか

目的—表浜の良さ、侵食等の現状を広く知らせしめ海岸整備の促進を図る。

推進事業

- ・海岸保全施設の整備:愛知県建設部
- ・海岸治山事業:愛知県東三河農林水産事務所
- ・農村総合整備事業〔神戸地区〕:田原町経済部農政課
- ・谷ノ口地区拠点整備基本設計業務:田原町総務部企画室
- ・道路設計業務〔町道谷ノ口海岸線〕:田原町建設部土木課

第4回表浜自然ふれあいフェスティバル

昨年
開催

平成13年10月27日(土)午前9時から表浜海岸全域でゴミを拾ったあと、大漁旗と横断幕が飾り付けられた東ヶ谷海岸に1,000人が集合し、石焼イモ、潮騒鍋、黒潮太鼓の演奏が行われました。



東ヶ谷海岸・シャワー付トイレ



表浜情報誌「潮騒」や「協議会事業」に関するご意見・ご要望・ご感想をお寄せ下さい。

発行:〒441-3492 愛知県渥美郡田原町大字田原字南番場30番地1 TEL0531-23-3507 田原町太平洋岸総合整備促進協議会(事務局:田原町役場企画室内)

R2100
再生紙を使用しています。